

集中治療に倫理的苦悩

大阪大大学院 グループ調査

新型コロナウイルスのパンデミック（世界的流行）で、重症患者を受け入れる集中治療室（ICU）に働く医療従事者の多くが通常と異なる倫理的・社会的課題に直面している。大阪大学大学院の加藤和人教授らの研究グループが、日本集中治療学会会員を対象に実施した調査結果で明らかにしました。

患者中心の意思決定 コロナ対策で困難に

調査は昨年7月、アンケートで実施。結果は15日と公表しました。新型コロナの治療に携わった

189人の回答を分析しました。

パンデミックがICUの診療体制に与えた影響では、「面会制限や感染対策の強化」「稼働病床の制限」が多くかかったと感じています。

医療従事者が認識した通常時と異なる倫理的・社会的課題として「感染対策によって面会制限が

行われ、患者と家族とのコミュニケーションが難しくなり、患者中心の意思決定が困難になった▽通常時とは異なる治療やケアを提供しなければならなかつた、などが明らかになりました。

また、回答者の38%が「社会的な偏見や差別を受けた経験がある」とし、受けた困難な状況は、過不足で必要な治療やケアが行えなかつた経験がある」とのべました。不足があった医療資源は、個人防護具（71%）、看護師の人的資源（45%）、医師の人的資源（33%）、ICU病床（28%）でした。

同グループは、ICUでは平常時から終末期の意思決定や緩和ケアなどの倫理的・社会的課題への対処が、患者・家族に望ましい医療を提供するためには不可欠だと解説。

同時に、医療従事者にとってもいたした課題を抱えた困難な状況は、過度のストレスとなり、バーンアウト（燃え尽き）につながる可能性があると指摘。なかでもどうぞ

「倫理的苦悩」は燃え尽きの重大な原因の一つとされており、今後、心理的サポートなどの強化が必要だとしています。